

家計における加工食品の購入額の動向

主任研究員 古江晋也

2023年は円安や輸入原材料の高騰などを受け、食料を中心に値上げが相次いだ。第1図の消費者物価指数(全国)の推移によると、生鮮食品を除く総合指数は前年比3.1%、食料は同8.1%の上昇と高い伸びとなった。その一方で家計調査によると、23年平均の消費支出(二人以上の世帯)は名目で前年比1.1%の増加(実質は同2.6%の減少)、勤労者世帯の実収入(二人以上の世帯)は名目で同1.5%の減少(実質は同5.1%の減少)となった。このことから2023年は「値上げラッシュのなか、収入が伸びないため、節約志向が強まった」といえよう。

1 値上げラッシュに見舞われた食料

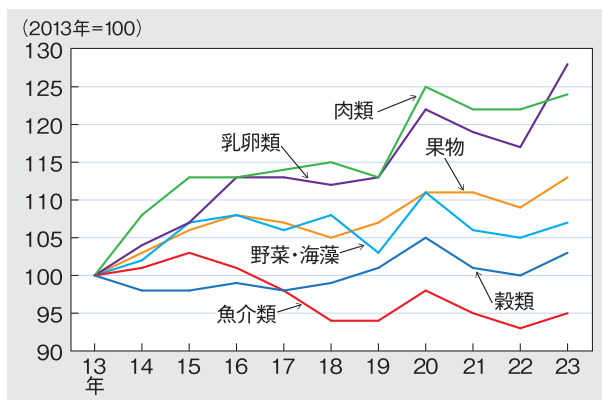
第2図と第3図は、2013年から23年までの家計調査における食料内の12カテゴリー(中分類)の年間購入額(名目)を指数化したものである(2013年を100とする)。

20年はコロナ禍による巣ごもり需要などが

ら食料全般の購入額は増加したが、外食への支出額は大幅に減少した。23年5月に新型コロナにおける感染法上の位置づけが季節性インフルエンザと同等となったこともあり、外食への支出額は19年並みに回復した。ただ日本フードサービス協会の「外食市場動向調査(令和5年間結果報告)」では、23年は売上の回復傾向は続いているが、客数は19年の水準まで回復していないとしている。

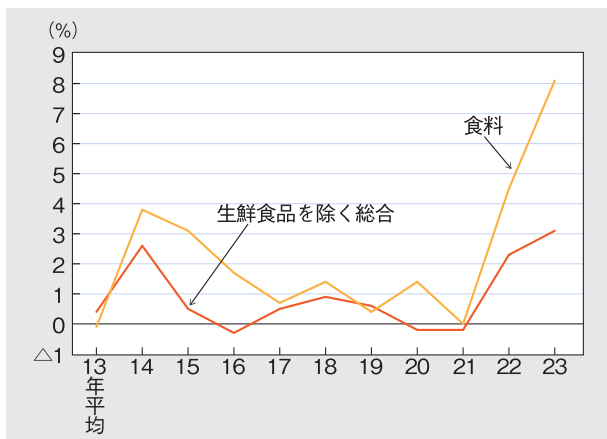
食料品に目を転じると、円安、ロシアのウ

第2図 食料の購入額の推移①



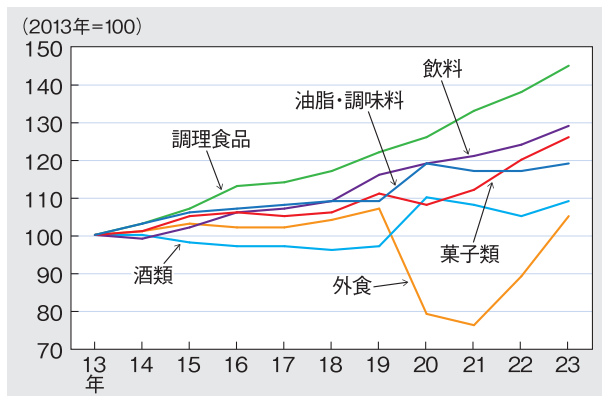
資料 総務省「家計調査」

第1図 消費者物価指数の推移(全国)



資料 総務省「消費者物価指数」前年比

第3図 食料の購入額の推移②



資料 第2図に同じ

クライナへの軍事侵攻などの影響などから、輸入原材料価格やエネルギー価格などが高騰した。こうしたなか、23年は調理食品、飲料、乳卵類、菓子類、肉類などの購入額が伸びた。

調理食品では、冷凍調理食品、サラダ、調理パンが大幅に伸びた。冷凍調理食品は原材料価格の高騰に加え、物流費、包装資材の高騰などを理由に各メーカーが相次いで値上げを実施した。しかし「調理時間を短縮したい」というニーズなどを捉えたことから、販売が減少しなかったメーカーもある。サラダの購入額が増加した理由は、夏場の猛暑によって高騰した生鮮野菜の代替需要と考えられる。調理パンは20年に購入額が低迷したものの、その後は増加した。

飲料では、乳飲料や乳酸菌飲料の購入額が増加した。これらの商品は近年、機能性強化打ち出しており、「睡眠の質」に焦点を当てるなどさまざまな価値提案を行ってきたことが注目される。メーカーのなかには生産量が追いつかず、販売を一部休止する動きも見られた。炭酸飲料も同様に増加している。酷暑であったことに加え、炭酸水、ノンアルコール炭酸飲料の需要が拡大していることを考えると、飲料は健康志向の強い消費者が市場をけん引していると思われる。

乳卵類はチーズ、粉ミルクの購入額の増加が目立ち、菓子類はチョコレート菓子やスナック菓子が増加した。チョコレート菓子やスナック菓子は「大人向け」に力を入れたり、糖質オフや減塩を訴求したりすることで市場を拡大させた。23年は原材料であるカカオや粗糖の価格高騰などもあり、菓子メーカーが相次いで値上げ、または容量減に踏み切った

ことも購入額を増加させることになった。

肉類は、豚肉、鶏肉、合いびき肉といった生鮮肉の購入額が増加したが、ハム、ソーセージ、ベーコンなどはほぼ横ばいで推移した。

なお23年の酒類の購入額は22年より増加した。品目別として、ビールの購入額は猛暑であったことや、酒税改正によって値下げとなったことなどが追い風となり増加した。ウィスキーは23年7月に大手メーカーが価格改定を行ったことから値上げとなったが、根強いハイボール人気もあり増加した。増税となったワインは購入額が減少し、減税となった清酒は横ばいで推移した。26年10月にはビールと発泡酒の税率の一本化、チューハイ類の増税が予定されている。

2 今後の加工食品価格上昇の要因

以上、家計における加工食品の購入額の動向をまとめてみた。2023年は、輸入原材料やエネルギー価格の高騰などのコストプッシュインフレが進行し、収入が伸び悩むなか、家計は節約志向を強める結果となった。

24年は「賃上げがデフレ脱却に不可欠」という認識のもと、労使間交渉が行われていることから食品業界でも高い水準の賃上げが見込まれるであろう。また24年4月からはドライバーの時間外労働時間の上限規制(いわゆる「物流の2024年問題」)が適用され、輸送費の値上げを公表する企業も増加している。これらのことを踏まえると、今後の加工食品価格は人件費と流通コストの価格転嫁が主な要因となり、緩やかに上昇していくと考えられる。

(ふるえ しんや)